

茂吉の再生

ササキ ヒサコ
佐々木 比佐子

一. はじめに

斎藤茂吉は2012年の今年、生誕130年を迎えた現代を代表する歌人のひとりです。明治、大正、昭和という時代を生きた茂吉の生涯は、苦難の連続でありましたがなかでも、大正14年茂吉の家の青山脳病院焼失直後、44歳の時と、昭和20年太平洋戦争終結の64歳の時は、大きな危機でありました。本発表では、大正14年の「茂吉の再生」と言える期間についての考察を述べてみたいと思います。

参考として掲げた年譜にありますように、大正13年の歳末に青山脳病院は焼失しました。茂吉の息子の北杜夫が、評伝『壮年茂吉』に記したように、茂吉は志した医学研究を断念せざるを得ませんでした。失意は極めて深刻でしたが、そこから茂吉は、病院再建に努める傍ら文筆活動を再開して活路を開いて行きます。

大正14年の茂吉の奮闘は、実にめざましいものでした。この時期に見られる特徴を整理しますと、資料に示したような3点があげられます。その中の「古典研究と短歌作品」について、ここでは述べて行きたいと思います。資料の年譜にもありますように、この年の茂吉は頻繁に旅を重ねています。3年余りにわたる留学から帰国した茂吉の目には、自国の風景があらためて新鮮に感受されたようです^①。その歴史と一体になった自然の体験は、茂吉の心の再生に大きく作用したと思われます。旅の合間を縫うように、茂吉は短歌作品の制作

に励みますが、そこには古典和歌集の影響が見られます。今日はこの点に絞って述べていきます。

二. 作品に反映する古典

(一) 『金槐和歌集』(源実朝 1192-1219) の影響

源実朝は、今年生誕 820 年を迎えた中世の歌人です。源頼朝と北条政子の次男で鎌倉幕府三代将軍でありましたが、28 歳で世を去りました。18 歳の時、藤原定家に和歌の添削を受けて、22 歳の 12 月に自撰歌集をまとめています。これが、『金槐和歌集』であります。

斎藤茂吉は、短歌制作以前から既に『金槐和歌集』を読んでいました。^② 明治 31 年、西行に興味を抱いていた 17 歳の茂吉が手にした『日本歌學全書』第 8 編(佐佐木弘綱 博文館 1891)には、『山家集』と併せて『金槐和歌集』も収められていました。はじめは専らこの書に頼って、明治 44 年から茂吉は歌誌『アラ、ギ』に、実朝の歌についての評論の連載を始めています。のちの大正 5 年に、これらは『短歌私鈔』(白日社)として出版されました。茂吉にとって、『金槐和歌集』はよく親しんでいた和歌集であったと言えます。

では、この『金槐和歌集』の歌が反映していると思われる、大正 14 年の茂吉の短歌作品を見てみましょう。はじめは、「この日ごろ」の小題で詠まれた次の三首です。

やけあとにあたらしき家たちがたし^{とほぞら}遠空をむれてかへるかりがね
ひとりこもれば何ごとにもあきらめて^{あぐら}胡座を^{よる}かけり夜ふけにつつ
きこゆるはあはれなるこゑと吾はおもふ^あ行^{ゆくはる}春^{かり}ぞらに雁なきわたる

『アララギ』第 18 巻第 5 号「五月集」

伝統的な歌題でもある「雁」が、茂吉の作品に初めて現れるのが、実はこれらの歌においてです。歌集『赤光』『あらたま』に、「雁」は出てこないのです。

何かとても意外な感じがするのですが、これ以降、茂吉は生涯「雁」という対象を歌い続けていく事になります。この事は茂吉と古典和歌との関係を考える上で、象徴的と言ってよい事と思われます。

これら三首に影を投げかけていると思われる『金槐和歌集』の作品としては、次の詞書と、歌一首です。

如月の廿日あまりのほどにや有けむ北むきの縁にたち出で
夕ぐれの空をながめひとりをるに雁の鳴を聞て讀る
ながめつゝ思ふもかなし歸る雁行らむかたの夕暮のそら

『金槐和歌集』 卷之上 春部

まず、実朝の「ひとりをる」という孤独に、茂吉の孤独が重なります。春の雁は帰雁、北に帰る雁の群れを見送るという情景になります。そして、『アララギ』『五月集』中のこれら三首の直前には、「きさらぎなかば」と題された歌「あわただしく手にとれる金槐集は蠹くひしまま焼けて居りたり」があり、この一首とすぐそのあとに置かれた「この日ごろ」三首とのつながりは深いと思われます。

さてもうひとつ取り上げてみたいのは、老いに伴う「白ひげ」「白毛」を詠んだ茂吉作品についてです。「この日ごろ」三首と同じ「五月集」に、詞書と共に次の歌があります。

焼けあとに湯をあみて、爪も剪りぬ
うつしみの吾がなかにあるくるしみは白ひげとなりてあらはるるなり

『アララギ』 第18巻第5号「五月集」

そして、雑誌『改造』に掲載された「童馬山房雑歌」137首の中の一首。

München にわれ居りしときさ夜ふけて陰の白毛を切りて棄てしか

この「童馬山房雑歌」は、これを読んだ当時の若者に少なからぬ影響を与えた作品で、佐藤佐太郎や柴生田稔といった茂吉の弟子となる人々が、短歌というものに関心をいだく契機となった作品でした。

茂吉の息子である北杜夫が評伝『壮年茂吉』の中で、この歌を「大した歌ではないが、大胆にほと陰などという語を使っており、いかにも茂吉流の歌であることは確かである。」と述べています。「ほと陰」は本居宣長の『古事記伝』のかぐ迦具土つちのかみ神の条に従った用法という自注があります^③。これらの二首はいずれも老いの自覚にまつわる歌で、苦勞の絶えない40代の茂吉の感慨を表現している作品と言えます。

これらに反映する『金槐和歌集』の歌としましては、次の二首があげられます。当時、茂吉が読んでいた『金槐和歌集』は真享本ですから、これら二首は隣り合う配列で並びます。

老人寒を厭ふといふ事を

年ふればさむき霜こそさえけらしかうべは山の雪ならなくに

老人憐歳暮

白髪といひ老いぬるけにや事しあれば年の早くも思ほゆるかな

『金槐和歌集』 卷之上 冬部

実朝は若者でしたから、これらの老人の歌は自分自身の事というよりも、老人の身になって詠むという歌でありました。実朝は、想像力と、共感する心の豊かな歌人であったように思われます。

茂吉はまず、「老人寒を厭ふといふ事を」の詞書に共感したように思われます。1月に帰国して焼け残った部屋で寒さを凌ぎながら日々を送るうちに、抱え込んだ苦しみが白いひげになって現われてきたという事なのですが、当時のことを茂吉は、「焼けた天井に紙を貼つて風を防ぎ、友のなさけによる紙帳のなかに籠つて寝た。」とも、書き記しています^④。

ミュンヘンは茂吉の留学先でありまして、この街で年を越し、新年を迎えた体験を茂吉は経ています。体験というものに、詞書「老人憐歳暮」と歌の持つあわれさが重なったのではないのでしょうか。

(二)『志濃夫廼舎歌集』(橘曙覧 1812-1868)の影響

橘曙覧は、近世末期の歌人、国学者でありました。今年は、ちょうど生誕200年となります。曙覧の歌「たのしみは朝おきいでて昨日まで無かりし花の咲ける見る時」の一首は、1994年、ビル・クリントン大統領の天皇皇后両陛下を歓迎するスピーチにおいて引用されております^⑤。現代の日本では広く読まれているとはいえませんが、今後ふたたび読まれてもよいのではないかと思われる歌人です。

斎藤茂吉は欧州留学前の、大正6年末から大正10年初めまで長崎医学専門学校ナガサキイテハクの教授として長崎に滞在していました。長崎医専の学生等によって刊行された文芸同人誌『紅毛船』オランダボネに、「古歌漫抄——橘曙覧の歌——」を連載していました。(全集では「橘曙覧歌抄」となる。)

曙覧の歌が反映していると思われる茂吉の作品を見ていきたいと思います。はじめの一首は、茂吉が『アララギ』に復帰の際に発表した一首です。

やけのこれる家いへに家族かぞくがあひよりて納豆餅なつとうもちひくひにけり

『アララギ』第18巻第3号「三月集」

結句の2音足らずの破調が、なにか異様な一首です。「家に家族が」と畳み掛ける表現も、状況の特異さを感じさせます。

一方、曙覧の歌はといいますと次の一首。

たのしみは妻子むつまじくうちつどひ頭ならべて物をくふ時

『志濃夫廼舎歌集』第三集春明艸「独楽吟」

実は、斎藤家において「家族があひより」という状況は、火災にあったが為に、この時初めて生じたことでした。茂吉の子、長男である斎藤茂太氏の随筆「青山脳病院のこと」に記された事情から、^⑥当時茂吉がいただいた感慨を察することは無理ではありません。

茂吉はかつて記した「古歌漫抄」に撰び論じたこともあった曙覧のこの一首を、自らのおかれることになった状況に重ねて、意識せざるを得なかったのではないかと考えられます。

次に取り上げますのは、歌集『ともしび』に「大正14年 長崎往反」として記された二首です。

かへりぢの汽車の中にも病院の復興の金をおもひて止まず
金^{きん}円^{えん}のことはたはやすきことならずしを^{きた}しをとして帰^{きた}り来^{きた}れり

大正14年の後半は、病院復興のため金策におわれる茂吉でした。

これらの歌に反映している曙覧の歌としては、次の一首を挙げることができます。

たのしみは錢なくなりて侘び居るに人の来りて錢くれしとき

『志濃夫廼舍歌集』第三集春明艸「独楽吟」

正岡子規は、この歌を評論「曙覧の歌」の中で賞賛しており、茂吉も「古歌漫抄」に於いて、子規に賛同しています。子規は、金銭について歌う事を厭わない曙覧の、恬淡とした姿勢を大いに称えるのでした。資料に子規の言葉を一部掲げましたが、その中での「あどけなくも」と記したところが、称賛に結びつくところと思われます。「思^{よこしま}い邪無し」に通じる称賛なのだと思います。

茂吉と曙覧では、状況はだいぶ異なるのですが、茂吉が臆することなく金銭に関する自身の苦労をこのように歌い得たのは、やはり曙覧の歌があつての事

と考えられます。

三. 『金槐和歌集』と『志濃夫廼舎歌集』の影響について

(一) 子規の短歌革新

さて時を少し遡って、ここで正岡子規の短歌革新について考えてみたいと思います。明治31年の「歌よみに與ふる書」発表の前後から、子規は本格的に幾つもの和歌集を読み始めます。そして「歌よみに與ふる書」の中で、子規は善き歌として実朝の歌について述べますが、曙覧については述べていません。橘曙覧については、明治32年に「曙覧の歌」という評論を発表しその中で、歌の革新の先駆として『志濃夫廼舎歌集』を称揚します。子規は曙覧を明治32年に読んだように思われがちですが、子規の短歌作品と曙覧の『志濃夫廼舎歌集』の歌を突き合わせて見ることから、実際はそれより前の明治31年には、子規は既に『志濃夫廼舎歌集』を読んでいたことがわかります。

この子規の短歌作品とは、遺稿集『竹の里歌』に明治31年の歌として収められ、詞書「金槐和歌集を読む 一首」と記された歌です。

試みに君の御歌を吟ずれば堪へずや鬼の泣く声聞ゆ

そして曙覧の歌は、『志濃夫廼舎歌集』第三集春明艸に、「戯れに」と題された一首です。

吾歌をよろこび涙こぼすらむ鬼のなく聲する夜の窗

このふたつの歌の対照に関しては、優れた先行研究がありました。村田正博氏の「子規開眼(一)——橘曙覧遺稿『志濃夫廼舎歌集』をめぐって——」^⑦という論文には、明治31年の子規の歌の背景に既に『志濃夫廼舎歌集』が存在していることが述べられています。この論文の中では、歌の対照のみならず書

簡の検討も行われております。

これらの事から、源実朝の『金槐和歌集』と橘曙覧の『志濃夫廼舎歌集』は、明治31年正岡子規の短歌革新の起点に在った歌集と言えます。

(二) 初心にかえる茂吉

斎藤茂吉は、明治37年(1904)23歳の時、子規の遺稿集『竹の里歌』を読んで文学に覚醒しました。子規が詠んだ涅槃図の歌「木のもとに臥せる仏をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ」に応えるように、地獄極楽図の連作を制作しましたが、これは子規受容を示す茂吉の最初期の表現でした。この時の子規の歌には、橘曙覧の影響が及んでおり、茂吉も子規の歌を介して曙覧の影響を受けていたと「古歌漫抄」に記しています。

茂吉は『竹の里歌』を読んでからは、子規の書き残したものを可能な限り読んだという事なので、^⑧「歌よみに與ふる書」で称賛された実朝の『金槐和歌集』については言うまでもなく、また茂吉にとって『金槐和歌集』は子規の歌に出会う以前から知る歌集でもあったので、実朝の歌には殊に親しみ、明治44年には『アラ、ギ』に「金槐集私鈔」を連載するに至っています。

正岡子規の示す方向性の理解につとめながら短歌制作に励む茂吉にとって、子規の短歌革新の起点にある『金槐和歌集』と『志濃夫廼舎歌集』は、茂吉の初心に深く関わる和歌集でありました。

長崎時代と欧州留学の期間を経て歌に距離を置いていた茂吉が、帰国すれば火難に遭って、蔵書焼失による医学研究挫折の精神的傷痕には相当すさんでしまうのですが、そのような中で『アララギ』に復帰する大正14年の短歌作品には、先にみて来たように『金槐和歌集』と『志濃夫廼舎歌集』の影響があります。茂吉は子規の短歌革新の方向性に立脚するという初心に立ち帰ることで、心の再生を果たして行ったと思われる。

そして、ここに於いては、留学以前に親しんでいた古典作品が、弱りきった茂吉を励ます力として働く様相が見られます。源実朝、橘曙覧といった人々の

人間性のこもる言葉、遺された歌の力が、寂しい茂吉の心のなかに働き、それに応えるように茂吉は短歌を詠んで行く、そのプロセスにおいて心の再生は為されていったのではないのでしょうか。

四. おわりに

以上述べてきたことにより、医学研究の挫折から斎藤茂吉が立ち直るという事の核心は、茂吉が文学に覚醒した当時の初心に帰ることにあつたと言えるようです。火難により、医学書のみならず文学書もほとんど焼失してしまった大正14年の茂吉にとっては、詰まるところ、己の身ひとつになって、自分自身の内奥に向き合う事だけしかなかったという事だったのかもしれませんが。

長崎時代から茂吉は、学問としての魅力から医学研究に関心が傾くようになり、『アララギ』の短歌に対しては、情熱を失いかけていました。まして、ウーンやミュンヘンの大学で医学研究に心身を打ち込む日々を過ごすうちに、「短歌に見切りをつける」^⑨というところまで実際至っていたのです。

そのような茂吉が帰国直後の災難に傷心極まる事態となり、逃げだす事もできず、粉骨碎身の働きで諸事を乗り切ったのが大正14年という時期でありました。この茂吉の、心の再生を援けたものとして挙げられるのは、日本の自然であつたり、当時の出版ブームであつたりするわけですが、やはり、『アララギ』という短歌表現の母体は、大きな存在でありました。そこに於いて歌うことへの復帰が、茂吉にとって再生の為の確かな一歩であつたようです。

茂吉作品に反映する古典についての考察から、子規の意志継承という方向性があきらかになり、立ち帰った初心に立脚して歌う姿勢が認められます。歌集『ともしび』には、昭和3年の歌として次の一首が記されています。

正岡子規 27回忌歌会 9月30日於田端大龍寺

うつせみは寂しきゆゑにたづさはり君にすがらむ世にし亡^なしとも

帰朝ののち、斎藤茂吉は古典研究に以前にもまして力を入れ、大正15年には『橘曙覧全集』（岩波書店）の校訂に関り、昭和2年に出版されました。これに関しては、今までの斎藤茂吉研究の詳細な年譜^⑩に見あたらず、この書物につきましては、今後詳しく調べてみたいと思います。また昭和4年には『金槐和歌集』（岩波書店／岩波文庫）が、斎藤茂吉校訂により出版されております。

【注】

- ①『斎藤茂吉全集』第10巻 「作歌四十年」のうち「ともしび抄」
- ②『斎藤茂吉全集』第9巻 「短歌私鈔第一版序言」
- ③『斎藤茂吉全集』第7巻 「茂吉小話」のうち「ともしび」 餘録（1）
- ④『斎藤茂吉全集』第10巻 「作歌四十年」のうち「ともしび抄」
- ⑤福井市橘曙覧記念文学館 <http://www.fukui-rekimachi.jp/tachibana/>
- ⑥斎藤茂太「茂吉の体臭」 「青山脳病院のこと」
- ⑦村田正博『文学史研究第48号』 「子規開眼（1）——橘曙覧遺稿『志濃夫廼舎歌集』をめぐって——」
- ⑧『斎藤茂吉全集』第14巻 「短歌への入門」
- ⑨品田悦一『斎藤茂吉』第4章ことばのゆくえ 5 滞欧三年間の空白
- ⑩柴生田稔編『斎藤茂吉全歌集』
本林勝夫校訂『斎藤茂吉』近代文学注釈大系
藤岡武雄『新訂版・年譜 斎藤茂吉伝』各氏による斎藤茂吉の年譜

主要参考文献

- 斎藤茂吉『斎藤茂吉全集』新版 岩波書店 1973-1976
アララギ発行所『アララギ』第十八巻 1925
正岡子規『子規全集』講談社 1975
佐佐木信綱『明治文學の片影』中央公論社 1934
源実朝『金槐和歌集』岩波文庫 岩波書店 1929
鎌田五郎『金槐和歌集全評釈』風間書房 1983
同 『斎藤茂吉秀歌評釈』風間書房 1995
橘曙覧『橘曙覧全集』岩波書店 1927
同 『橘曙覧全歌集』岩波文庫 岩波書店 1999
釈迢空『曙覧の歌』高遠書房 1934
上田三四二『斎藤茂吉』筑摩書房 1964
柴生田稔編『斎藤茂吉全歌集』筑摩書房 1968
藤岡武雄『新訂版・年譜 斎藤茂吉伝』沖積舎 1991
北杜夫『壮年茂吉』岩波書店 1993
岡井隆『歌集「ともしび」とその背景』短歌新聞社 2007
村田正博『文学史研究第48号』 「子規開眼（1）」
大阪市立大学 国語国文学研究室文学史研究会 2008

* 討議要旨

東京外国語大学の村尾誠一氏は、非常に美しい言葉で語られた、大変説得力がある発表であったが、実際に歌を比較した時、本当に影響を受けたと見なしてよいのか疑問に残るところがあると指摘した。同氏は、その顕著な例として「白ひげ」の歌を取り上げ、茂吉の歌は彼自身の非常に切実な体験に基づき München という地名を意図的に横文字で詠んだりしており、その多くの部分が古典的な題詠歌である『金塊和歌集』と比べて本当に影響関係が指摘できるのか、むしろ違いが指摘できるのではないかとその意見を示した。発表者は、鎌田五郎氏が『金塊和歌集』の評釈書の中で、題詠であっても自分が老人の身になるという想像をしながら共感して詠まれている歌ではないかと指摘しており、本発表においても、題詠であれ、一首を立ち上げていくためには、単なる題詠、言葉だけの世界と突き放しては歌えないのではないかと、特に火災後の茂吉は気持ちいが非常にすさんでしまい、雑誌に発表した文章にも心が乱れていたことが窺われるが、そうした状態の中で『金塊和歌集』を目にしたことを想像すると、実朝の和歌は優しく、たとえ題詠であることが解っていても老人をこのように詠んだことに茂吉は反応したのではないかと考え、取り上げたと説明した。更に発表者は、和歌の影響関係を特定することは確かに難しいと考えていると述べた。村尾氏は、影響関係の特定が難しい点に同意しつつ、しかし、単なる題詠という見方には問題があり、題があり想像力があって歌が生まれる、自分とは違うものに想いを馳せていくという面があり、題詠にもやはり秀歌があると述べた。また同氏は典拠の問題の難しさに関連して、鬼が泣くというのも、根本的に言えば『古今集』仮名序まで遡るものであることを指摘した後、中世の和歌の本歌取りに関しても、本当にこれで良いのかは常に考えていることであると感想を述べた。次に小曾戸明子氏より、斎藤茂吉は非常に論じられる機会の多い歌人であるが、女性の観点から、どのような切り口で論じるかに関心を抱き、注目してきた中で、今日の発表は啓発されるところが大きく、全体の「再生」のテーマにも深く関わっているとの評価が示された。また同氏は、昭和二十年の茂吉は今日の発表では言及されなかったが、全体的な論考として纏められるのを期待していると前置きした上で、今回こうした発表を聴くことができたのも、弟子としての佐藤佐太郎から師である茂吉を眺めた視点というものが大変有効に働いているのではないかと、弟子の系譜の流れの下の方から辿り、それをひとつの糸口として対象に迫っていく方法を教えられたとの意見を述べた。